

P-061

「赤ちゃん歯科相談」利用者の実態調査

今村 由紀¹、武内 倫子²、橋本 吉明³、
林 恵利佳¹、伊藤 文子¹

¹ がくえんのもり小児歯科

² 日立市心身障害者歯科診療所

³ 都立東大和療育センター

【目的】

小児専門歯科医院で3歳以下の子どもの保護者を対象に行っている「赤ちゃん歯科相談」では、歯科医師または歯科衛生士が保護者からの相談に対応している。今回、「赤ちゃん歯科相談」利用者の実態を調査することにより、低年齢児の保護者が子どもの歯や口腔に関してどのような悩みや心配を持っているかを明らかにする。

【対象と方法】

平成30年5月の開設から令和4年12月に、「赤ちゃん歯科相談」を利用した0～3歳の乳幼児の保護者492名を対象とする。

利用時に保護者が記載するアンケートをもとに、子どもの年齢分布、相談内容、利用のきっかけを示す。なお、「利用のきっかけ」はアンケートに当該項目を追加した令和1年10月から令和4年12月に利用した306名を対象とする。

【結果】

1. 年齢分布

利用時の子どもの年齢は0カ月～5カ月17名(3.5%)、6カ月～11カ月218名(44.3%)、1歳0カ月～1歳5カ月157名(31.9%)、1歳6カ月～1歳11カ月59名(12.0%)、2歳0カ月～2歳5カ月15名(3.0%)、2歳6カ月～2歳11カ月20名(4.1%)、3歳0カ月～3歳5カ月4名(0.8%)、3歳6カ月～3歳11カ月2名(0.4%)であった。

2. 相談内容(複数回答)

相談内容は、自由記載されたものを内容の類似したもので分類した。多い順に、歯のケア方法239名、歯並び165名、歯みがきを嫌がる106名、むし歯予防97名、歯の生える時期・本数60名、むし歯かもしれない46名、授乳39名、歯肉・舌・小帯など32名、食事・離乳食23名、ケガ18名、その他53名であった。

3. 利用のきっかけ(複数回答)

利用のきっかけは、ホームページ227名(74.2%)、紹介43名(23.3%)、その他25名(8.2%)、無記入11名(3.6%)であった。

【考察】

日本では子どもが出生後、1歳半歯科検診まで歯科の専門家に口腔内を診てもらった機会のない人が多い。今回の結果より「赤ちゃん歯科相談」利用者の約80%が1歳半未満の子どもの保護者であり、この時期に子どもの歯や口腔に関して様々な悩みや心配を持っていることがわかる。その内容は口腔ケアの方法やむし歯予防について、歯並びについてなど多岐にわたっている。利用のきっかけはホームページから約74%と最も多く、保護者自身がインターネットで検索して利用される方が多かった。歯の萌出、口腔ケアの開始など保護者が悩みや心配をもちやすい低年齢の時期にこそ、歯科の専門家が保護者の相談を受けることができる場が必要であることが示唆された。

P-062

大学附属病院小児歯科による小児在宅訪問歯科診療患者の実態調査

芦澤 みなみ、梅津 糸由子、林 陽佳、松尾 恭子、
杉澤 香恵子、中島 咲帆、飯領田 采奈、
宇佐見 智里、白瀬 敏臣、内川 喜盛

日本歯科大学附属病院小児歯科

【目的】

近年増加している当科の小児在宅訪問歯科診療の実態を調査し、現状の把握と課題について検討した。

【対象】

2021年4月～2023年1月に当院小児歯科で訪問歯科診療を行った0歳～15歳45名(男児26名、女児19名)。

【方法】

診療録を基に年齢、基礎疾患、医療的ケアの状況、依頼ルート、主訴、歯科受診経験、口腔清掃状況、口腔内所見、口腔機能訓練について調査した。

【結果】

年齢は11か月～14歳6か月で年齢分布は2歳が14名(31.1%)と最も多かった。調査期間内の初診患者数は39名であった。基礎疾患は「染色体又は遺伝子に変化を伴う症候群」が26名(57.8%)、そのうち18トリソミー症候群が10名(22.2%)と最も多く、次いで「周産期に発生した要因」が10名(22.2%)であった。医療的ケアの状況は「人工呼吸器」21名(46.7%)、「在宅酸素療法」8名(17.8%)、気管切開「あり」23名(51.1%)、吸引「あり」は36名(80.0%)であった。依頼ルートは「訪問看護ステーション」が29名(64.4%)であった。主訴は「口腔のケアについて」が26名(57.8%)、次いで「口の中を診てほしい」が7名(15.6%)、歯科受診経験は「なし」が33名(73.3%)であった。家庭での口腔清掃は、歯ブラシの未使用は7名(15.6%)、フッ化物配合歯磨剤の未使用は13名(28.9%)であった。口腔内所見は治療が必要な齲蝕「あり」が5名(11.1%)、エナメル質形成不全「あり」が23名(51.1%)、歯石「あり」が26名(57.8%)であった。摂食嚥下機能訓練の必要性「あり」は44名(97.8%)であった。

【考察】

訪問看護師からの依頼が多いことから口腔内への関心の高さが伺えた。一方、不相应な口腔清掃ツールの選択が散見された。これらを改善するために、訪問看護師が同席時に保護者と一緒に個々に合う口腔清掃指導の機会があることで適切な知識の普及に繋がる。そして無菌顎期や萌出直後から認める異常の発見、口腔感覚の評価と脱感作によって口腔清掃への受容および口腔機能発達や感覚統合の一助となること、経管栄養の患児にも歯石沈着を認め治療の必要があることから、訪問看護師と歯科が連携した在宅療養の早期介入は重要であると考えられる。今後は患児の口腔内環境がどのように変化していくのか調査、検討する予定である。